

伝播する衝動

『緋文字』における領土拡張の言説

松丸彩乃

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の『緋文字』(*The Scarlet Letter*) の舞台は17世紀初期のイギリス植民地ボストンであるが、当時牧師は宗教的指導者であるだけでなく、政治的にも民衆を導く存在であった。「ニューイングランド・ウェイ」と呼ばれる政治システムでは、教会員でなければ公民権を得られず、また教会員から選挙によって選出された人物が政治的指導者になる(増井 67)。教会は植民地運営に深く関わる場所であり、そこで行われる礼拝は共同体の結束を深めるものである。本発表では、牧師アーサー・ディムズデルと彼の選挙日説教に注目する。選挙日説教を行うことは植民地の牧師にとって大変な名誉であることは異孝之によって既に指摘されているが、本論ではディムズデルの選挙日説教の内容に注目し、彼を突き動かす衝動の本源は何かを吟味した。

1. ディムズデルのレトリック

ボストン居留地の教会員から「炎の舌 (the Tongue of Flame) (142) を持つ者、「地上の聖者 (The saint on earth) (144) と称されるディムズデルだが、良心の呵責に耐えかね、その心のうちを説教中に何度も吐露している。11章「The Interior of a Heart」においてディムズデルは「墮落した、恥ずべき」を意味する形容詞 *vile* を用い、自身を最悪の罪人であると述べるが、具体的な罪の内容は言及しない。彼の告白は民衆の目には謙虚な美德として映るのみで、人々は言葉の裏に隠された真実には気づくことがない。罪を告白しようと説教台に昇ったにもかかわらず、ディムズデルは曖昧な言い回しを繰り返し、狡猾にも自らを安全圏へと押し戻していく。語り手は彼を「狡猾だが自責の念に駆られた偽善者」(144)であると指摘しており、『アメリカン・ノートブックス』内のディムズデルの原型とされる人物像とも重なっている (AN 180)。ディムズデルの語り口を彼の弱さとして捉える向きもある一方、曖昧な説教で真実を覆い隠す様子を Erika M. Kreger は「信用詐欺師 (a con man) (Kreger 325) のごまかし術であると指摘しており、彼の持つ天賦の才は自身の罪から民衆の目を逸すために使われる。

2. ヘスターからディムズデルへと移る impulse

自己欺瞞を続けるディムズデルは次第に肉体的・精神的に衰弱していくが、一時的に肉体と精神を回復する象徴的な場面が2回あり、そのどちらにもヘスター・プリンが関わっている。

そもそもヘスターは官能的で東洋的な性質を持った女性とされ、ピューリタンの規範から外れた存在である。また、彼女の居住地は森と海とに面した小屋で、ニューイングランドには似つかわしくない「思想 (thoughts) (164) が訪れるとされる。先天的な情熱的な性格と、新世界においてピューリタン社会から孤立したことで後天的に得た旧大陸の自由な思想を持ち合わせているのがヘスターである。彼女の情熱のかつ自由な特質は、ディムズデルとは対極のもので、彼女の情熱は「衝動 (impulse)」という形で何度も発露する。『緋文字』において「衝動／衝動的 (impulse/impulsive)」という語は24回登場するが、そのうち9回ないしは10回¹はヘスターに、8回はディムズデルに対して使用されている。前半10章までは「衝動」という語はもっぱらヘスターに対して使用されるが、11章以降「衝動」の行為者はディムズデルへと移り、彼が衝動的に動くようになっていく。そのきっかけとなるのが、12章「The Minister's Vigil」での晒し台での場面である。

晒し台の上でヘスター、パール、ディムズデルが手と手を繋いだとき、ディムズデルは「新しい生命の流れ (rush of new life) (153) が心臓に激流となって流れ込むのを感じ、3人は「電気の輪 (an electrical chain) (153) を通じて一体となる。Oxford English Dictionary によれば、impulse という語は「衝動」という意味以外に、電気がもたらす「衝撃」(OED 5.) や神経や筋肉の中に走る病理的な「衝撃」(OED 4 b.) といった意味も持つ言葉であることに注目したい。ヘスター親子との物理的接触は、彼の心臓の脈動 (pulse) に物理的に影響を及ぼしたと言える。その結果、それまでディムズデルは肉体的・精神的に疲弊していたにもかかわらず、翌日の安息日説教において説教の出来栄を飛躍的に向上させることに成功している。ヘスターとの皮膚を介した接触は、「炎の舌」をも強化するのだ。

この効果がさらに発揮されるのが、17~18章にかけての森での密会以降のことである。ヘスターと手と手を取り合い、彼女の「大西洋を渡ってヨーロッパ大陸へと帰還する」という提案を受け入れたとき、ディムズデルはキリスト教化されていない (unchristianized) 法の秩序がない地域の、原始的で自由な空気を吸ったかのような

気分になる (201)。ディムズデルはこれから選挙日説教というピューリタン社会において大変重要な政治的かつ宗教的な行事に望もうとしているにもかかわらず、この提案を受け入れたことで非キリスト教の異教のものに近づいていく。選挙日説教の原稿を仕上げることができたのは、森というピューリタンが寄り付かぬ異教の地でヘスターと触れ合い、精神と肉体が活力を取り戻したからであろう。20章ではディムズデルに対し5回に渡って「衝動／衝動的」の語が繰り返し用いられ、ディムズデルが以前に比べ衝動に駆られやすくなっていることが示される一方、それ以降ヘスターに対して「衝動」の語は用いられなくなっていく。森での邂逅により、ヘスターの特性であった衝動 *impulse* が、ディムズデルへと移譲されていったのである。

3. 一人からコミュニティ全体に広がる *impulse*

前章では、ヘスターとの身体接触が契機となってディムズデルの肉体と精神に生命力を漲らせる例を2つ確認した。本章では森での接触によって回復した活力が、どのように選挙日説教に活かされたか、そしてその説教が民衆に及ぼした影響について考察する。

ディムズデルの選挙日説教の内容は台詞として書き残されていないが、地の文からその内容を窺い知ることができる。彼の演説の主題は「神と人間社会との関係性について」(249)であり、ニューイングランドの地に「新しく集った人々に対し、高く栄光ある運命が待っていることを予言すること」(249)であった。新総督就任という植民地ボストンにおける記念すべき日に、ディムズデルは共同体を率いる牧師として、「自分たちが荒野に切り開いてきたコミュニティに、今後必ず輝かし未来が訪れるのだから、そのために結束せよ」民衆にと呼びかけているのだ。植民地の発展は、大西洋に面するボストンから西へ西へと未開の地を切り開き、領地を増やすことに他ならない。この拡張への欲望を秘めた予言めく説教は、19世紀当時「マニフェスト・ディスティニー」の旗印の元、西へ西へと国土を広げていった事実と重なり合う。

ヘスターの衝動に喚起されたディムズデルの説く説教は、民衆たちをかつてない熱狂の渦に巻き込んでいく。人々はディムズデルの説教の意味が分からなくても、彼の「音声発生器官 (*vocal organ*)」(243)から発せられる音と抑揚に反応し、音波に反響するかのように自然と身体を「前後に揺らして (*swayed to and fro*)」(243)してしまう。さらに、説教の音声は聴衆の耳の中で反響すると、聴衆1人1人の中に「衝動」が生まれだし、説教が終わった頃には1つ1つの衝動が凝集され「共通の衝動 (*universal impulse*)」(250)へと変貌していく。ヘスターからディムズデルへと個人間で移っていった衝動が、ディムズデルという拡声装置を経て、コミュニティ全体へと伝播していったと言えよう。ディムズデルの「炎の舌」は、ヘスターとの接触によって強化され、新天地における名声を瞬間的に不動のものにしたのである。

本論1章で確認した彼のレトリックは、最期の告白においても健在だ。自分はヘスター、パールと共に7年前にここに上がるべきだった人間なのだと、自らが犯した罪を仄かしておきながら、その罪の名を口にすることは最後までなかった。彼の仄かしのレトリックは、選挙日説教の予言にも通じる。彼は説教の中で予言のように仄めかすだけで、ディムズデル本人がその予言に従って行動をするのではない。彼の言葉に従って領土を拡張するのは民衆である。ディムズデルは言葉によって人々を先導し、言葉によって土地を開墾する者なのである。選挙日説教によって民衆に広がった衝動は、領土拡張の言説として人々を西へ西へと向かわせる推進力 (*impulse*) となったのだ。

¹ ヘスターに対して *impulse/impulsive* が使われた回数を「9回ないしは10回」と表記しているのは、24章の *impulse of a fond heart* (262) の行為者がヘスターであるかパールであるかが曖昧なためである。

Works Cited

- Hawthorne, Nathaniel. *American Notebooks. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne XIII.* edited by William Charvat, et al. Columbus, Ohio State UP, 1972.
- . *The Scarlet Letter. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne I.* edited by William Charvat, et al. Columbus, Ohio State UP, 1972.
- “impulse, n.” *Oxford English Dictionary Online*, December 2018, www.oed.com/view/Entry/92919. Accessed 30 January 2019.
- Kreger, Erika M.. “‘Depravity Dressed up in a Fascinating Garb’: Sentimental Motifs and the Seduced Hero(ine) in *The Scarlet Letter*.” *Nineteenth-Century Fiction*, vol.54, no. 3, Dec. 1999, pp.308-335. *JSTOR*, doi: 10.2307/2903143.
- 増井志津代『植民地時代アメリカの宗教思想-ピューリタニズムと大西洋世界』上智大学出版, 2006.
- 巽孝之「おまえはクビだ！ ナサニエルホーソーンの選挙文学史」『ニュー・アメリカニズム 米文学思想史の物語学 増補決定版』青土社, 2019, pp303-29.